

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370886

研究課題名(和文)阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎的研究

研究課題名(英文) Research on the chiefs of The Kofun Period in The Abukuma Valley, The Northeast Japan

研究代表者

菊地 芳朗 (Kikuchi, Yoshio)

福島大学・行政政策学類・教授

研究者番号：10375347

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本列島の古墳分布北縁地域にあたる阿武隈川流域に分布する古墳時代墳墓の調査研究を通じ、この地域の首長層の動向を通時的に把握することを目的に実施した。

この目的のため、本研究では、フィールド調査および既存重要資料の整理分析の2テーマを設けた。フィールド調査では、福島県須賀川市団子山古墳の発掘調査と同泉崎村原山古墳群の測量調査を実施し、それぞれの墳形、規模、構造をほぼ明らかにした。既存重要資料の整理分析では、福島県中島村四穂田古墳の出土品の整理を行い、報告書を刊行した。

こうして得られた成果と考察を本研究の成果報告書として刊行し、学界に共有することができた。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this research were to do archaeological field work in The Abukuma Valley of northeast Japan where is the northernmost range of tumuli, from that, to reconstruct the activities of chiefs of the area in The Kofun Preriod(3rd-7th century A.D.). For the purposes, I excavated Dangoyama Tumulus in Sukagawa City and surveyed Harayama Tumulus Group in Izumizaki Village, and made their details clear. On the other, I researched the artifacts from Yohoda tumulus in Nakajima Village with colleagues and published the research report of it. Finally, I published the generalization report about this research, I offered many new information to the study of The Kofun Period.

研究分野：考古学

キーワード：古墳時代 東北 阿武隈川流域 団子山古墳 首長層 政治的動向

## 1. 研究開始当初の背景

福島県中央部を貫流し宮城県南部で太平洋に注ぐ阿武隈川の流域には数多くの古墳時代墳墓が分布する。阿武隈川流域は大きな断絶なく古墳が築造された太平洋側北限の地域にあたり、ここに分布する古墳時代墳墓の動向分析により、古墳が築造された契機やその背景に迫るための重要な情報を得ることが期待できる数少ない地域の一つである。

しかし、東北や北関東などの近隣地域と比較しても、阿武隈川流域の墳墓の内容、ひいてはここを拠点に活動した首長層の動向には不明な点が多かった。その理由はつぎの3点である。

a. 未調査のため墳形や年代等の基礎的な検討材料に欠ける古墳や横穴墓が多いこと。

b. 重要墳墓でありながら、未報告あるいは不十分な報告にとどまるものが少なくないこと。

c. 阿武隈川流域全体、さらにはこの地域の古墳時代全時期の墳墓を対象とする考古学的分析および比較検討が、十分に行われていないこと。

このように、阿武隈川流域は、墳墓の分析をもとに古墳分布北縁地域の歴史的特質に迫る鍵を握る地域と考えられながら、研究の基礎となるデータや考古資料の報告が必ずしも十分でないことが、研究の進展の大きな妨げとなっていた。

## 2. 研究の目的

以上の背景にもとづき、本研究は二つの目的のもとで推進した。

第一に、阿武隈川流域の古墳時代墳墓に対する良好なフィールド調査の実施を柱としつつ、この地域に関する調査研究実績をもつ古墳時代研究者を結集して未報告重要資料の公表と検討を加えることで、阿武隈川流域の古墳時代墳墓の動向を詳細に把握すること。

第二に、獲得した成果を東日本規模で比較分析することで、この地域で活動した首長層の性格・動向・地域間関係を究明し、古墳分布北縁地域において阿武隈川流域の果たした歴史的役割と、古墳の成立と消滅の背景を解明すること。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究の枠組み

上記目的を達成するため、本研究では「フィールド調査」と「既存重要資料の整理分析」の二つのテーマを設定し、各テーマに配置した研究者を中心に調査研究を行い、その成果を「総合研究」として全メンバーによる定期的な研究集会での議論を踏まえ総括した。また、最終年度には研究総括と社会還元を目的として、研究メンバーをパネラーとする公開シンポジウムを開催した。

### (2) フィールド調査

福島大学行政政策学類考古学研究室の主体により、中通り中部に所在する須賀川市団子山古墳の発掘調査を毎年夏季に実施した。また、同主体により、中通り南部に所在する原山古墳群の測量調査を2014年春季に、中通り北部に所在する古墳時代遺跡の分布調査・現況確認調査を2015年春季に、それぞれ実施した。

### (3) 既存重要資料の整理分析

不時発見によって2011年に東北初となる古墳時代鉄製短甲などが出土した福島県西白河郡中島村四穂田古墳の出土品整理を、上記研究メンバーとともに2013年度に実施し、報告書を作成・刊行した。また、各研究メンバーは、阿武隈川流域の古墳時代重要資料の未報告例に対する資料化や、既報告資料の再検討を随時進め、研究集会等で発表・報告した。

そして、これら3か年のフィールド調査および既存重要資料の整理分析の成果は、研究成果報告書と公開シンポジウム資料集を兼ねて刊行した『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎的研究』（福島大学行政政策学類 2015年11月刊）において総括した。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の総体的意義

従来、東北の古墳時代を概説するにあたっては、前期における福島県会津、中期における宮城県仙台平野というように、各時期における顕著な遺跡・遺物が分布する地域を“つまみ食い”的に取り上げ、東北全体を代表させる方法がとられることが少なかった。しかし、各時期・地域における古墳時代文化の様相は、大局的に共通する部分をみせつつも決して一様でないことから、従来の方法では東北の古墳時代社会の実態を十分把握できないだけでなく、古墳の成立・変遷・終末の過程と背景に詳細に迫ることが困難であった。

それに対し本研究は、福島県中通りと宮城県南部という古墳分布北縁地域のなかでもさらに限定された範囲を対象とするものではあるが、安定的に古墳が築造された北限にあたる阿武隈川流域に焦点をあて、古墳とその時代の諸問題を総合的に検討した初めての試みといえる。

### (2) 各論考の要旨

ここで、上記の研究成果報告書に掲載した各論考の要旨を掲げる。

青山博樹は、阿武隈川流域の古墳時代集落を悉皆的に取り上げ、集落規模・住居構造・出土遺物等をもとに、各時期の集落の特徴・変遷・背景を検討した。これにより古墳・生

産・祭祀等の検討を行ううえで基礎となる情報が整えられたことになる。

金田拓也は、古墳時代中期の特徴的遺物である石製模造品を対象に、東北での編年を整備したうえで、その成立・変遷・波及の過程をしめし、阿武隈川流域に石製模造品が展開するにあたり北関東の勢力との交流が大きな役割を果たしたことを推定した。

佐久間正明は、石製模造品を題材に阿武隈川流域の首長層の動向をうかがおうとしたものであり、古墳や方形区画施設(首長居館)出土の石製模造品の分析から、中期における祭祀の類型化や地域間交流の復元をおこなった。両者の報告により、阿武隈川流域の首長層および下位層にかかわる中期の祭祀のあり方が、より具体的に復元できることになった。

柳沼賢治は、これまで多くが未報告であった郡山市南山田遺跡出土須恵器の整理公表、および東日本の古式の須恵器出土遺跡の集成をつうじ、宮城県仙台市周辺、福島県阿武隈川中上流域、栃木県宇都宮市周辺にそれらが集中していることを明らかにし、これが首長層の動向の反映であることを推測した。

大栗行貴は、阿武隈川流域に分布する特徴的な埴輪群の指摘、および東北と関東との埴輪の比較をもとに、東北の古墳時代全体の埴輪の動向をまとめた。

高橋満は、本研究で整理と報告書作成をおこなった福島県中島村四穂田古墳とその遺物について再度検討をおこない、この古墳が本来は前方後円墳の「大塚古墳」である可能性が高いことや、阿武隈川上流域の古墳造営期の幕開けとして位置づけられるものであることをしめした。

横須賀倫達は、中期から終末期の東日本各地の古墳や横穴から出土する突起付冑、骨鏃、二円孔鐔、錫製品という「特異」な副葬品の分析をつうじ、東北南部と関東の首長層との間に双方向の交流があったものの、7世紀前半を通して彼らがしだいに中央の政治的影響下に取り込まれていく過程を推測した。

草野潤平は、阿武隈川流域の横穴式石室の詳細な検討から、その展開過程と波及元が時期によって一様でない一方、6世紀末以降になると特定地域(茨城県北東部、栃木県中部)との交流が盛んになっていく過程をしめした。

荒木隆は、前方後円墳と祭祀遺跡の立地と地理的要因をもとに古墳時代の交通網の整備状況を検討し、前期の海上交通路と主要河川による内陸交通の連結から、後期の河川交通と馬を使った陸上交通による広域の地域間ネットワークの形成へと進み、律令期の交通体系として引き継がれていくあり方を描いた。

菊地芳朗は、各メンバーによる3年間の調査研究成果もふまえて阿武隈川流域の古墳時代を総括的に検討し、前期の古墳・集落の粗密が大きい状況から、中期に北縁地域随

一の隆盛といえるあり方へと展開し、後・終末期に地域性が増大しつつ関東との関係を深める一方で近畿との直接交流が見えにくいあり方を指摘した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

KIKUCHI, Yoshio 2015 The Japanese peripheries: To the north and south (英文)『21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信』平成23~26年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書,大阪大学大学院文学研究科, pp.45-55

菊地芳朗 2014『集落と古墳時代社会』古墳時代の考古学』9,同成社, pp.21-34

菊地芳朗 2013『出土武器類からみた城の山古墳』『城の山古墳の謎に迫る』,胎内市教育委員会, pp.7-12

菊地芳朗 2013『骨角製品』『古墳時代の考古学』4,同成社, pp.219-231

[図書](計7件)

菊地芳朗・清水勇希(編)2016『団子山古墳3』,福島大学行政政策学類・福島大学行政政策学類考古学研究室, pp.22-25

菊地芳朗(編)2015『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎的研究』平成25~27年度科学研究費補助金基盤研究研究成果報告書,福島大学行政政策学類, pp.93-99

藤澤 敦・高瀬克範・斎野裕彦・青山博樹・八木光則・菊地芳朗 2015『倭国の形成と東北』東北の古代史2,吉川弘文館, pp.164-194

菊地芳朗・清水勇希(編)2015『団子山古墳2・原山古墳群1』,福島大学行政政策学類・福島大学行政政策学類考古学研究室, pp.21-24, 41-44

菊地芳朗 2014『古墳時代環頭大刀集成』,大阪大学大学院文学研究科, pp.59

菊地芳朗・佐藤由可子(編)2014『団子山古墳1』,福島大学行政政策学類・福島大学行政政策学類考古学研究室, pp.48-52

菊地芳朗ほか 2014『四穂田古墳 出土遺物調査報告書』,福島県中島村教育委員会, pp.33-38

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

菊地 芳朗 (KIKUCHI, Yoshio)

福島大学・行政政策学類・教授

研究者番号: 10375347

(3)連携研究者

長橋 良隆 (NAGAHASHI, Yoshitaka)  
福島大学・共生システム理工学類・教授  
研究者番号： 10292450

(4)研究協力者

柳沼 賢治 (YAGINUMA, kenji)  
(公財)郡山市文化・学び振興公社・所長

高橋 満 (TAKAHASHI, Mitsuru)  
福島県立博物館・主任学芸員

佐久間 正明 (SAKUMA, Masaaki)  
(公財)郡山市文化・学び振興公社・主任  
学芸員

青山 博樹 (AOYAMA, Hiroki)  
福島県教育庁・文化財課・文化財調査員

横須賀 倫達 (YOKOSUKA, Tomomichi)  
文化庁・美術学芸課・文化財調査官

大栗 行貴 (OOGURI, Kouki)  
国見町教育委員会・主事

荒木 隆 (ARAKI, Takashi)  
福島県立博物館・主任学芸員

金田 拓也 (KANEDA, Takuya)  
新潟市文化財センター・文化財専門員

草野 潤平 (KUSANO, Junpei)  
(公財)山形県埋蔵文化財センター・主任調  
査研究員